

主 題：神による救いと人による救い5  
 聖書箇所：ローマ人への手紙 10章9-13節

私たちはすでに10章9-10節で、救いを得るために信じなければならない二つの真理について学んで来ました。それは「イエスが主である」こと、すなわち、主は人となられた神である、イエスは人となられた神であり主である、すべての主権者であり、すべての統治者である。その方を信じることだと学びました。また、「神がイエスを死よりよみがえらせたこと」、私たちの罪の身代わりとして十字架で死んだ後、イエス・キリストはその死から敢然と肉体をもってよみがえられた、この二つの真理が救いには必要であり、私たちがこれらを心から受け入れるなら私たちは救われるということを見て来ました。この救いは神の恵みであることは言うまでもありません。今朝、私たちはこの「神の恵み」について見て行きますが、その学びをする前に、私たちがもう一度考えておかなければならないことは、この「心から受け入れる」ということです。ことばでは簡単ですが、果たして、それはどういうことか、そのことについて学んでから、「神の恵み」について続けて学んで行きたいと思えます。

☆二つの真理を「心から受け入れる」ことについて

A. 救い

1. 神との個人的関係を築く

まず、私たちが「救い」を考える時に、それは「神との個人的関係を築くこと」であると、そのように言うことが出来ると思えます。私たちの国でも多くの人々がイエス・キリストのことを知っています。どこで生まれたか、どこで育ったか、十字架で死んだことなどを知っています。しかし、問題は、主イエス・キリストを個人的に知っている人がどれ位いるかです。はっきりしていることは、非常に少ないということです。つまり、イエス・キリストを知っている人はこの国でも殆どかも知れませんが、イエス・キリストを個人的に知っている人は1%もいません。「イエスはすべての人の救い主」ということと、「イエスは私の救い主」ということは異なります。ですから、救いは神とあなたの個人的な関係なのです。

1) イエスは私の「主」

9節に「あなたの口で、」「あなたの心で、」「あなたは救われるから」とありますが、「あなた」はすべて単数です。しかも、「告白する」「信じる」という動詞もすべて単数です。つまり、それはあなた個人の、あなた自身の行為だからです。10節にも「心に信じて」「口で告白して」とありますが、この「信じて」「告白して」もどちらも単数です。これから見る11節に「彼に信頼する」「失望させられる」とあるのもすべて単数です。そして、12節「呼び求める」、これも単数です。ということは、何を教えているのでしょうか。「救いはあなたと全能の神との個人的な関係」だということです。皆さんよくご存じのヨハネ3章16節のみことば「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」、この「信じる者」の「信じる」が単数です。「永遠のいのちを持つ」の「持つ」という動詞も単数です。みことばは明確に私たちに「救いは神とあなたとの個人的な関係である」と教えています。

ですから、イエスを主と告白するということは、非常に個人的なことであり、そして、神との非常に密接な関係を意味します。私たちが認めようと認めまいとイエスは「神」です。しかし、言われていることは、その神を私の神として受け入れることです。信じようと信じまいとイエスは「主」です。しかし、この方を私の主として受け入れるのです。弟子の一人であるトマスがこのようなことを弟子たちに言いました。イエスの復活を信じなかった彼は「私は、その手に釘の跡を見、私の指を釘のところに差し入れ、また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません。」(ヨハネ20:25)と、そして、八日後、復活されたイエスに言われてその通りにしたところ、彼は「私の主。私の神。」と信仰告白をするのです。

2) イエスは私の「友」

そして、感謝なことに、そのように神と個人的関係を築いた者のことを主は「友」と呼んでくださいます。ヨハネ15:15「わたしはもはや、あなたがたをしもべとは呼びません。しもべは主人のすることを知らないからです。わたしはあなたがたを友と呼びました。なぜなら父から聞いたことをみな、あなたがたに知らせたからです。」、このように親しい関係に置かれた私たちのことを、神は何と「友」と呼んでくださるのです。全能なる神、すべてをお造りになった主権者なる神、絶対者なる神が「あなたはわたしの友だ」

と呼んでくださるのです。

ですから、私たちはこの大切なみことばを見て、一人ひとりが考えなければいけないことは、  
(a)あなたは主イエス・キリストをあなたの救い主として、また、あなたの主として神として信じているかどうか？

(b)主はあなたのことを「わたしの友」と呼んでくださるかどうか？

この二つのことを信じる、この真理を受け入れるということは、話を聞いているとそれ程難しいことではないと、そのように思う人がいるかも知れません。しかし、聖書の中には自分は救われていると思っ  
ていてもそうではなかった人が多く記されているということを考えてみなければいけません。

## 2. 神との個人的関係を築かない信仰 : 「心から受け入れる」のではないこと

### 1) この真理を知識として蓄えるだけ — ただ「知っている」ということ

たとえば、神の真理をたくさん学んで、そして、その真理を知識として蓄えているだけの人、そのよ  
うな人たちがいます。神学的なことにもすべて答えることができる。聖書の質問に対してもすべて答  
えることができる。聖書カルタをしてたくさんを知っていると、そのような人はいっぱいいます。  
でも、知っているからと言っても救われているとは言えません。ヤコブ2:19ではこのように言っ  
ています。「あなたは、神はおひとりだと信じています。りっぱなことです。ですが、悪霊どももそう信じて、身  
震いしています。」、なぜ、身震いするのでしょうか？彼らは自分たちが永遠のさばきに向かっていること  
を知っているからです。サタンも悪霊たちも「神はおひとりだと」知っているのです。でも、その知識は  
彼らを救っていません。

マルコの福音書12章に記されていますが、ある一人の律法学者がイエスのもとにやって来ます。イ  
エスが人々との質疑応答においてすばらしくお答えになったので、イエスを誉めるのです。そのときに、  
彼がイエスに対して賢い返事をしたのでイエスはこのように言われました。マルコ12:34「イエス  
は、彼が賢い返事をしたのを見て、言われた。「あなたは神の国から遠くない。」それから後は、だれもイエス  
にあえて尋ねる者がなかった。」、驚きです。「あなたは神の国にはいることができる。」とは言われな  
かったのです。彼は律法学者です。教理をよく理解していたでしょう。神に関する知識をいっぱい持っ  
ていたでしょう。彼が言っていることも正しかったのです。イエスはそれを聞いて「あなたは確かに賢  
い返事をした」と言います。だから「あなたは神の国から遠くない。」、あなたはまだ神の国にはいっ  
ていないと言われたのです。

ですから、このイエス・キリストのすばらしい救いをいただくということは、ひと言で言うと、大変  
難しいのです。そのことは少し後で触れます。ですから、お分かりになったように、この神との個人的  
な関係、つまり、救いをいただくためにどれ程知識を蓄えたとしても、その知識はその人を救わないと  
いうことです。

### 2) 真理の一部だけを受け入れる

神の真理の一部だけを受け入れることはダメです。というのは、この10節の「イエスを主と告白す  
る」ことについて、ある人は「イエスが神であることを認めることである」と言います。それは間違っ  
ていませんが、その後このように言います。「だから、イエスを神、救い主と信じるなら救われるので  
あって、「主」と信じなくても救われる、それでいいのだ。」と言うのです。つまり、このみことばが  
言っていることは「イエスを神と認めたらいい、それを信じたらいいだけであって、イエスをあなたの  
主人として、あなたの主として信じることは救いにおいて必要ではない。信じた後、信仰の成長ととも  
にイエスを主として受け入れ、彼を人生の主として従うときがやって来る」ことだと言うのです。

その考えを皆さんの頭の中で整理してみてください。イエスを神と信じた、イエスを主と信じなくて  
もいい、それは信じた後のことだと…。私たちが考えなければいけないことは、このみことばを通して  
パウロが私たちに教えたこと、それは私たちが何を信じなければいけないのか？ということ。それは  
すなわち、イエスがだれであるかということでした。主イエスを「主」と告白することは、イエスが  
だれかということです。確かに、イエスは神です。しかし同時に、イエスは主です。主権者だからです。  
すべてを統治されている方です。ですから、イエスは神である、それは信じるけれども、イエスは主で  
あるという、その部分を受け入れないということは、イエスに関するすべてのことを受け入れているこ  
とになりますか？私たちが考えなければいけないことは、そのような信仰が、果たして、神に喜ばれる  
ものかどうかです。そのような信仰が私たちに救いをもたらしてくれるかどうかです。

というのは、ヨハネの福音書1章12節に「しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じ  
た人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。」とありますが、ここに「その名を信じた」と記さ  
れています。ある人は「名前を信じることか」と思うかもしれませんが、この当時、その人の「名」と  
はその人の全人格、その人のすべてを表わしました。ですから、「名を信じる」とは「その人のすべて

を信じる」ということでした。たとえば、詩篇5：11には「こうして、あなたに身を避ける者がみな喜び、とこしえまでも喜び歌いますように。あなたが彼らをかばってください、御名を愛する者たちがあなたを誇りますように。」とあります。「御名を愛する者たち」、神を愛すること、神の一部だけを愛することではなく、当然、神のすべてを愛するということです。

ですから、「名」とか「御名」ということは、その人の全人格、そのすべてを表わすのです。「その名を信じた人々」とはその人のすべてを信じた人たちです。聖書の中に記されている神を神として、そのままその通りに信じることです。ですから、私たちが気を付けなければいけないことは、神が言われているそのすべてを受け入れるということです。ごく一部だけを信じること、それは気を付けなければいけないのです。

## B. 信じること

「信じる」ということについてしばらく考えてみましょう。神と個人的な関係を築くこと、それは真の神を私の神として受け入れることです。それは、

### (a) 神は創造主であり、私はこの方によって造られた被造物だというその関係を認識すること

神を信じると言ったときに、私たちは神と対等の存在でないことを当然考えなければいけません。対等ではないのです。神です。神とは、聖書を見ると、すべてをお造りになった方です。人間が勝手に必要に応じて造った偶像ではありません。聖書が教える神はすべてのものを、あなたをお造りになった創造主です。ですから、神を私の神として受け入れるということは、この方は私の創造主であり、私はこの方によって造られた被造物だという事実を認識することです。

### (b) 主従の関係を認識すること

真の主を私の主として受け入れるということは、この方が主権者であり主人であるなら、私はその方に仕える奴隷だということです。そのような主従の関係を私たちは認識しているのです。私たちの問題は、そのような関係が存在しているにもかかわらずそれを認めて来なかったことです。相手は神なのです。相手はすべてのものによって崇拜される主権者なのです。そのようなお方と個人的な関係を結ぶときに私たちが覚えておかなければいけないことは、「私はこの主人に仕えるただの奴隷にすぎない」ということです。そのことを認識するのです。その事実にはっきりと目を留めなければいけないのです。その上で、敢えて二つのことだけを上げます。

#### 1) 信じることは愛すること

私たちが神を信じるということは「愛すること」です。これはもう何度も見て来たように、最も大切な戒めとして与えられているものです。『心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして主を愛し、また隣人をあなた自身のように愛する。』（マルコ12：33）です。私たちはそれをしていないのです。ですから、私たちが神を信じるということは、私たちはこのことを自らに問いかねなければいけないということです。この地上の何ものよりも自分自身よりもこの方を愛するということです。イエスはそのことを問われています。たとえば、マタイ10：37-39「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。また、わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。：38 自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません。：39 自分のいのちを自分のものとした者はそれを失い、わたしのために自分のいのちを失った者は、それを自分のものとします。」、イエスがここで教えたかったことは、家族や自分のいのちを捨てるなら、結果として、救いをいただくということではありません。なぜなら、マタイの福音書でも、私たちが両親を愛することは教えられていることだからです。

では、何を言われているのでしょうか？ 私たちは私たちの両親を愛しますが、それ以上に、私たちは神を愛するのです。私たちは自分自身の健康に関して配慮しなければいけません。しかし、私たちは自分以上に神を愛するのです。だから、イエスを信じるということは、私たちの夢、計画などをすべて神の前に差し出すことです。ルカ14：26に「わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることができません。」とあります。「憎む」とは嫌いになるということではなく、どちらを余計に愛するかということを行っているのです。つまり、ここでイエスが言われたことは「あなたが愛する家族よりも、あなたが愛する自分のいのちよりも、それよりもわたしを愛しますか？」ということです。もし、この答えが「ノー」なら神と個人的な関係を築けるでしょうか？

先ほども話したように、確かに、この救いを得ること、信じることは非常に難しいことです。イエスを信じたなら私のすべての罪が赦されて、すべてがバラ色になる？「いいえ!」、イエスは非常に厳しいメッセージをお与えになりました。「あなたが大切にしてきたもの、あなたが愛するもの、それらを喜んで捨てて、それらよりもわたしを愛しますか？」と問われたのです。ですから、「信じる」とい

うことを考えたとき、私たちが覚えるべきことは、何ものよりも神を愛することです。

## 2) 信じることは従うこと

先ほどから見てるように、イエスが主であるということは、このイエスがすべての主権者であり、統治者であるということ認めることです。それを受け入れることです。それなら、主である神はご自分の子に服従を要求されて当然ではありませんか？主である神、主人である方がその奴隷たちに対して、「わたしの命じることをやりなさい」と言われることは当然のことです。だから、旧約聖書の中にはそのことが繰り返されているのです。神が繰り返して命じられたことは「従うこと」でした。

申命記6：1には「これは、あなたがたの神、主が、あなたがたに教えよと命じられた命令——おきてと定め——である。あなたがたが、渡って行って、所有しようとしている地で、行なうためである。」とあります。神はなぜこの命令を与えたのでしょうか？それはあなたがたが「行なうため」です。新しくカナン之地に入っていくとする、ヨシュアが率いて約束の地に入っていくとするのです。そのときに神が言われたことは「この命令にしっかり耳を傾けなさい。それに心を定めなさい。なぜなら、あなたはそれを行なうことが必要だから。」でした。皆さんもよく覚えておられるように、イスラエルの初代の王、サウル王と預言者サムエルのことです。サウルは神が言ったことよりも、自分で考えて自分の最善を選択しました。アマレク人を聖絶しなさいと言われたのに彼はそれをしませんでした。自分の勝手な理由で家畜の中の良いものを残していました。良いものだから、すばらしい家畜だから、いけにえのために…と。サムエルはこのように言っています。Ⅰサムエル15：22「するとサムエルは言った。「主は主の御声に聞き従うことほどに、全焼のいけにえや、その他のいけにえを喜ばれるだろうか。見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。」。

皆さん、神が被造物である私たちに何を要求しておられるのか、はっきりしています。神の命令に従い続けることです。だから、あなたが神の前に立った時に神が問われるのはそのことです。救われているクリスチャンたちなら、あなたは神の命令に従ったかどうか、忠実だったかどうかによってあなたの褒美が決まるのです。未信者なら、神に従わなかったということでその罪がさばかれる訳です。それは永遠の地獄です。どちらにしても、私たち被造物が神から受けた命令は、この創造主なる方、主権者なる神に従うことです。当然のことではありませんか？だから、信じたと言いながら従うことをしない者たちを、神は本当にお喜びになるかどうかです。ルカの福音書6章46節では「なぜ、わたしを『主よ、主よ。』と呼びながら、わたしの言うことを行なわないのですか。」とされています。あなたは「主」と呼んでいながら、「主人」だと言っていないながら、なぜ従わないのか？です。

### 《結論》

ですから、まとめると、「イエスを私の主と信じる」ということは、この方が私の神だということ認めるだけでない、信じるだけでない、この方を自分の主人として受け入れて、その方に従って行くことを決心することです。この方は主権者であり神だから…。

A. P. ギブスという神学者はこう言っています。「主イエスを自分の人生の主として言い表わすことは、人の前で、主イエスをあなたの主、支配者として認めることであり、心の中で主イエスを最高位につけ、その生涯を主に委ね、生きている間中、主に従うことを意味します。」と。その通りです。それが救われる信仰なのです。そのためには、これまで主に逆らってきた罪を悔い改めることが必要です。その上で、主の前に正しいこと、「主に従うこと」を行なうのです。

ですから、確かに、先ほどから話しているように、救いをいただくということは非常に難しいことです。私たちはこのようなことを聞くと奇異に感じませんか？何となく救いとは簡単であるかのように思っています。でも、イエスは「狭い門から入りなさい」と言われました。マタイ7：13「狭い門からは入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこからは行って行く者が多いのです。」、大きな門と狭い門がある訳です。大きな門から入る者はどこに行くのですか？天国ではありません。みな、滅びに向かっています。狭い門から入る者たちが救われるのです。

### 《適応》

ですから、私たちが救いに関して考えなければいけないことは、

a) あなたは神である主イエスをこの世の何ものよりも、あなたのいのちよりも愛しているか？

イエスかノーのどちらかです。

b) あなたはあなたの神である主をあなたの主として服従することを決心したか？

神はそのことを私たちに問うておられます。それが神が私たちに教えられた「救いをいただく術」なのです。主イエスをあなたの神、あなたの主と信じて従う決心をすることです。私たちはこの神を受け入れるために、そして、この方に従って行くためには、これまで私たちが神に従って来なかったその罪

を神の前に悔い改めて、そして、「私は今からあなたの前に正しいことを行なって行きます。」と、つまり、主に従って行くという選択をすることが必要です。

### C. 神の恵み 11-13節

さて、これらのことをパウロはここで私たちに教えてくれた後、今度は11節から「恵み」について教えています。「救い」について教えたパウロ、そして、私たちに「信じる」とはどういうことかを教えたパウロは、続いて「恵み」について私たちに教えます。

#### a) 「信じた結果、その人は義と認められる」の説明

11節を見ましょう。「聖書はこう言っています。『彼に信頼する者は、失望させられることがない。』」、ここには「すなわち」という説明をするための接続詞が付けられています。実は、11節にも12節にも13節にも付いています。ということは、これは前の節を説明しているのです。11節では10節でパウロが語った「信じた結果、その人は義と認められる」ということの説明をしているのです。その説明のために、パウロは11節でイザヤ書28：16を引用しています。これはもうすでにパウロが9：33で引用しました。その引用をそのままここに持って来る訳です。しかも、最後の所だけです。それが『彼に信頼する者は、失望させられることがない。』ということばです。すでに見た通り、「彼」とはイエスのことです。『彼に信頼する』、つまり、彼を信じる者たちのことです。彼を信じる者は失望させられないのです。皆さん、ここを見ても気付かれるでしょう？11節には「彼を信じて告白する者」とは書かれていません。すでに10節で見たように「彼を信じる者」です。

また、「失望させられることがない。」ということも9：33で学びました。「恥じ入ることがない、恥をかくことがない」という意味でした。そして、これはさばきのことでした。私たちが主の前に立ってさばきを受けるときに、神が私たちのことを弁護してくださる、私たちはその罪のさばきから守られるということです。だから、そのときに「イエスさまを信じたら救われると聞いていたのにそうではなかった。」と失望することがないということです。罪赦されたあなたは確実に、神の前で罪のさばきを受けることがないと、そのことをパウロは言ったのです。

#### b) 信じるすべての人に義が与えられる

もう一つ、11節の『彼に信頼する者は、失望させられることがない。』、ここに「すべて、だれでも、～のものはみな、あらゆる人」という意味の形容詞がついているのです。つまり、パウロはこのことばを引用することによって、「信じるすべての人にこの義が与えられる。そこには何の例外もない。」ということ語って、最初に説明する接続詞が付いていると先程言った通り、12-13節で、今話した神には何の差別もないということの説明をするのです。ローマ3：22に「すなわち、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、それはすべての信じる人に与えられ、何の差別もありません。」とある通りです。ですから、12節に「ユダヤ人とギリシャ人との区別はありません。」と、すなわち、この救いは信じるすべての人に与えられるということです。「信じるすべての人に救いは与えられる」、なぜなら、

### ◎私たちの神は、

#### 1. 差別のない神 12節

12節「同じ主が、すべての人の主であり、主を呼び求めるすべての人に対して恵み深くあられるからです。」と、パウロは私たちの神は差別のない方だと言います。

##### (1) あらゆる人種が含まれる

ユダヤ人、ギリシャ人、すなわち異邦人、すべての人種です。創造主なる神はすべての人を同じように愛されるのです。このことは、パウロが3章30節に「神が唯一ならばそうです。この神は、割礼のある者を信仰によって義と認めてくださるとともに、割礼のない者をも、信仰によって義と認めてくださるのです。」と記しています。

##### (2) あらゆる罪人が含まれる

また、差別のない神はあらゆる人種に対して恵み深いだけではなく、あらゆる罪人に対してもそうだとします。神の前にはみな同じです。ローマ3：23に「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、」とある通り、すべての人は罪を犯したのです。しかし、その罪人を神は受け入れてくださり、赦しを与えてくださるのです。

信じるすべての人に神は救いを与えてくださる、そこには何の偏見も何の差別もありません。また、同じローマ3：29には「それとも、神はユダヤ人だけの神でしょうか。異邦人にとっても神ではないのでしょうか。確かに神は、異邦人にとっても、神です。」とあり、そのことはすでに学びました。神はそのように、何の差別もなくすべての罪人に対してこのようにしてくださるのです。問題は私たちです。私たちがそのような神がおられることを少し知っていながら、その神を信じようとしないのです。そのことはすでに、ローマ1：16や1：28でパウロが教えてくれました。信じないのはその人の選択です。

## 2. 恵み深い神 12-13節

12-13節を見ると、パウロは恵み深い神についての説明を加えて行きます。「主を呼び求めるすべての人に対して恵み深くあられるからです。」と。「恵み深い」とは「恵みが豊かである」、「豊かな恵み」を意味しています。その恵みに溢れるお方が、私たち信じる一人ひとりにすばらしい恵みを与えてくれたと言うのです。

◎どのような恵みをいただいたのか？

### (1) 祝福

ヨハネ1：16に「私たちはみな、この方の満ち満ちた豊かさの中から、恵みの上にさらに恵みを受けたのである。」とあります。私たちは毎日の生活においていろいろな必要を抱えています。神はその必要を与えてくださり、力をくださり、ときには慰めをくださる、励ましをくださる、喜び、感謝をくださる、そして、常に私たちとともにいてくださり、約束されたことを私たちの内に果たされる神です。神は私たちにみことばを与えてくださった。それによって私たちは神を知ることができます。教会が与えられました。信仰の友や家族が与えられました。互いに励まし合い、祈り合うことができます。私たちには学ぶ自由が与えられています。主を称えるすばらしい環境が与えられています。私たちには奉仕が与えられています。このようなリストを上げるならたくさんあります。皆さん、私たちには神からどんなに大きな祝福をいただいているか、そのことをしっかりと覚えることが必要です。パウロはそのことをエペソ人への手紙1章18-19節でこのように言っています。「また、あなたがたの心の目がはっきり見えるようになって、神の召しによって与えられる望みがどのようなものか、聖徒の受け継ぐものがどのようにに栄光に富んだものか、19 また、神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるかを、あなたがたが知ることができますように。」、神の与えてくださった祝福を忘れてはならないと、私たち信仰者が神が与えてくださったすばらしい祝福を覚えることによって、その信仰生活が変わって行くと言います。

ですから、確かに、イエスを信じて神のすばらしい恵みをいただいたあなたは、その恵みを覚えながら歩んでおられるはず。もし、そうでなかったら、もう一度そのことを思い出して、神の恵みを感謝する者として、称える者として生きることです。神は確実に、私たちにはすばらしい祝福を与えてくださっています。

### (2) 救い 9, 10, 13節

「恵み」は祝福だけではありません。13節を見ると、パウロは旧約聖書のヨエル書2章32節を引用することによって、この恵みについて説明しています。13節「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。」のです。ヨエル2：32「主の名を呼ぶ者はみな救われる。」。神はいろいろな恵みを与えてくださった、恵み深い神はあなたにすばらしい祝福である「救い」をくださったのです。毎日の生活において、私たちは多くの祝福で満たされています。同時に、すばらしい「救い」をいただきました。そのことが9節にも10節にも、そして、13節にも記されています。「救われる」、「救われる」、「救われる」と。

パウロはピリピ3：8-9でこのような表現を使ってこのことを表わします。「それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくと思っています。それは、私には、キリストを得、また、9 キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。」。「私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、」と、この救いと他のものを比較したときに何もかも比較にならないと、それほど、この「救い」はすばらしいと言うのです。パウロはこの恵みをしっかりと覚え、そのことをここに記すのです。

最後に、13節にはこのように記されています。「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。」と。これは先程も見たようにヨエル書のみことばの引用です。「主の御名」、「主」とは神の契約の名前「ヤーウエ」が使われています。ですから、「主の御名を呼び求める」とは真の神に対して呼び求めることです。対象を覚えてください。「主」はヤーウエです。このことばをパウロは引用しているのです。そして、「呼び求める」とは「礼拝」という説と「祈り」という説があります。ジョン・マレーという神学者は「この『主の御名を呼び求める』という決まり文句は、神にささげられる礼拝を表明する旧約聖書特有の方法である。祈願の礼拝に適用される。」と言っています。

ですから、ある人たちは神を礼拝するときを使う表現であると言います。また、ある人は「祈り」だと言います。どちらにしても、このヤーウエという神に対して礼拝をささげる、この神を祈り求めると、それがヨエル書が教えたことです。パウロはそのヤーウエに対するみことばをイエスに適用したのです。

つまり、パウロは「あの旧約で教えられている礼拝に相応しいお方、祈りをささげるに相応しいあのヤーウエ、イエスはまさに同じ神だ。イエスはその神なのだ。」と、そのことをここで再び明らかにするのです。だから、この方に救いを求める者を神は救ってくれるのです。この真の神イエス・キリストをあなたの神、あなたの主人と心から受け入れて、この方が成して下さった救いのみわざをあなたが心から受け入れるなら、あなたはこの救いに与るのです。主イエス・キリストはあなたを罪から救うその力をお持ちなのです。この方はあなたをその罪から永遠の地獄から救い出すことができます。その力をもっておられるのです。なぜなら、イエスは神だから、それができるのです。

私たちが覚えなければいけないことは、私たちの救いの方法ではなくて、神が備えて下さった救いの方を受け入れることです。神のメッセージを受け入れて、そして、この神が約束された救いを是非あなたのものとしてください。ここにいらっしゃるだれかが、救われていると思っていたけれどそうではなかったということが決してないように。自らを吟味して、正しくこの救いをいただいて、そして、永遠の備えをしてください。そのように心からお勧めします。

《考えてみましょう》

1. 人が救われるためには、何を信じなければなりませんか？
2. 信じるとはどういうことかを説明してください。
3. あなたに与えられた恵みを挙げてください。
4. この恵みの主にあなたはどのように応えられますか？